

恥辱の競泳水着発表会。極限まで透ける水着で、丸裸同然！

「それでは開発責任者から、簡単ではありますが、新作水着について説明させていただきます」

都内の記者会見場横の控室に、4 人の競泳選手が集められていた。

この日はここで、スポーツメーカーのズノミーが新作水着を記者向けに発表することになっている。

新作水着を着て、発表会に参加するのは、男女 2 人ずつの現役競泳選手たちだった。

その 4 人の選手たちを前にして、ズノミーの新作水着開発責任者から簡単な説明が行われていた。

「新作の水着は新素材で、水に浮きやすく、着用していてもとても軽く感じられると思います」

選手たち 4 人は、ときおりうなづきながら、熱心に聞いていた。

「こちらの女性用の競泳水着には赤外線盗撮対策もしっかりと施されています。

みなさんにご存じかとは思いますが、近年、女性スポーツ選手が性的な画像や映像を撮られる事案が起こっています。水着を赤外線撮影で透けさせようとする者も現れています。

その対抗策として、今回の水着を開発しました。

アスリートが競技に集中し、盗撮被害を抑制できる水着となっております」

ズノミーの開発担当者が説明を続けている。
女子競泳選手が水着を赤外線盗撮されることは、これまでに何度もあった。

かなり前には、有名女性競泳選手たちが多数赤外線盗撮被害に遭った。

そのときの、映像がアダルトサイトなどで販売されていた。

「我々は今回、赤外線盗撮対策をするために、あえて、赤外線に透けやすい素材というものを研究しました。赤外線に透けやすい水着をまずは、制作しました。

それにより、どのような素材がより透けやすいかを改めて理解することができました。

その上で、逆に、赤外線では透けないような水着を開発することに成功しました。

こちらの2着の女性用競泳水着ですが、見た目は全く同じに見えます。でも、1着はほとんど、赤外線では撮影すると、下の中身が透けてしまう水着です。

もう1着は、赤外線カメラを全く寄せ付けない水着となっております」

4人の競泳選手たちに、2着の女性用競泳水着が見せられていた。

その2着の水着は見た目は全く同じだった。
「すごーい。見た目は、ホントに全く同じですね」

1人の女子競泳選手が言った。

26歳の倉橋恭子だ。

倉橋恭子はバタフライが専門の選手で、現在はこの水着メーカーであるズノミー所属の選手として活動している。

「ホントですねー」

もう1人の女子選手がそう言った。

21歳の女子大学生スイマーの水沢朱音だ。

現在は、水泳の名門、M大学水泳部に所属している。

専門は平泳ぎで、最近では、『美しすぎる女子大生スイマー』として雑誌に取り上げられたりもしている。

「これ間違えて透ける方を着たりしたら大変なことになるね」

倉橋恭子がそう笑いかけながら言った。

「ホントですねー」と水沢朱音はまた同じ相槌を繰り返した。

見た目が全く同じ、極限まで透けてしまう水着を着れば、赤外線盗撮をされてしまう。

水着を着ていながら、ほぼ裸を撮られてしまうようなものだった。

その場にいた人全員が、そんな様子を頭の中で想像していた。

でも、倉橋恭子と水沢朱音は、楽し気にただ笑っているだけだった。

「それじゃあ、1時間後から水着発表会が開始されますので、選手の皆様は着替えていただいた後、待機となりますので、よろしくお願いいたします」

ズノミーの社員が4人の競泳選手たちを待機

場所へと案内する。

倉橋恭子は頭の中に、ちょっとした、よからぬ策が浮かんできていた。

もし、水着発表会の場で、あの透ける方の水着を水沢朱音に着させてみたら、一体どうなるのだろう。

そんなことを思いついたのだった。

倉橋恭子は、ここ数年、女子競泳界を引っ張ってきた存在だった。

23歳のときに出場したオリンピックでは銅メダルを獲得した。

名実ともに、日本女子競泳界のエースだったけれど、年齢が20代中盤に差し掛かるころから、少しずつタイムが伸び悩むようになってきていた。

それでも、代表選手に選ばれることは確実だし、実績も知名度もある。

今回のズノミーの水着発表会のモデルとして選ばれていた。

倉橋恭子自身がズノミー所属ということもあり、発表会に参加することは当然だった。

少しずつキャリアの落ち目に差し掛かりつつある倉橋恭子と入れ替わるように台頭してきたのが水沢朱音だった。

バタフライと平泳ぎで種目が違うとはいえども、意識し合う間柄ではあった。

水沢朱音はなかなかの美人で、頭角を現し始めてすぐにテレビ番組や雑誌で取り上げられ

るようになった。

『美しすぎる現役女子大生スイマー』

『美しすぎる美女アスリート』

水沢朱音にはそんな形容詞がつけられていた。倉橋恭子は自分が結果を出し始めたときとの違いを実感していた。

倉橋恭子は『美しすぎる』とか、『美女』と言われたことはほとんどなかった。

結局、見た目が大事なのと、そういう嫉む気持ちがあった。

だから、倉橋恭子は水沢朱音に対して、直接的なうらみがあるわけではないけれど、マイナスな感情を持っていた。

お互いに代表合宿で顔を合わせて、一緒に活動する時期もある。

特段仲がいいというわけではないけど、仲が悪いということもなかった。

会えばそれなりに普通に会話する間柄だった。

「ねー、佐藤さん。私たち選手って、どこで着替えるんだっけー？」

倉橋恭子が同僚であるズノミーの若い女性社員に訊ねた。

「あっちの会議室が待機場所になっています。着替えの場所は別でとってあります」

「そっかー」

倉橋恭子はそう言いながら歩き続けていた。

他の３人の選手も会話しながら、待機場所の会議室を目指していた。

「私たちが着る水着って、もう更衣室に用意さ

れてるの？」

倉橋恭子がズノミーの女性社員、佐藤に訊ねる。

「はい。男女ごと別の更衣室に、もう用意されてます。お名前もわかるように、ご用意してあるので、それを着ていただいたらけっこうです」

「そう。わかったー」

倉橋恭子はそう言った。

4 人の選手は一旦、待機場所の会議室へと入った。

そこには、先ほど開発担当者から説明を受けたときに見た、2 枚の女性用競泳水着が置かれていた。

赤外線カメラで撮影されても透けない加工を施した水着と、逆に極限まで透けるように加工された水着だ。

「これ、マジで、同じ水着に見えるよなあー」

男性競泳選手が水着を手に取りながら言っている。

「ほんとそうですよねー」

水沢朱音がそう言った。

「えっ、これどっちがどっちなんだっけ？」

もう 1 人の男性選手が言った。

「ちょっともうー、やめてくださいよ。こっちがちゃんとした水着です」

水沢朱音がはしゃぎながら楽し気に話している。

「じゃあ、選手の皆さんは、別室を男女ごとの

更衣室にしていますので、そちらで着替えてください。すでに更衣室に、着ていただく水着をご用意しております。着替えが終わったら、アウターを上に着て、またこの場所に戻ってきておいてください」

ズノミーの佐藤がそう言うと、選手たちが会議室を出て、更衣室を目指そうと部屋を出かかる。

「あっ、そうだ、朱音ちゃん」

倉橋恭子が水沢朱音にそう声をかけた。

「なんですか」

「あの、さっきね、水泳連盟の会長が朱音ちゃんのこと探してたの言い忘れてたわ。着替える前に、会長に挨拶しておいた方がいいかも」

倉橋恭子が水沢朱音にそう言った。

全くの嘘ではあったが。

「そうなんですか。わかりました。会長、さっきの場所にいますよね」

「うん、たぶん」

「じゃあ、私、ちょっと行ってきますねー」

水沢朱音はそう言って、部屋を小走りに出ていった。

「じゃあ、私は先に着替えときますねー」

「よろしくお願いします」

ズノミーの社員、佐藤がそう言い、その場を離れた。

男性競泳選手の２人は、すでに会議室を出て、男子更衣室に向かっていた。

倉橋恭子は会議室に１人になったことを確認して、極限まで透ける競泳水着を手にした。

会議室を出て、女子更衣室へと向かう。
確かにすでに水着が用意されていた。
『倉橋恭子様』、『水沢朱音様』とシールが貼られてある透明のビニール袋の中に、競泳水着が入ってあった。
倉橋恭子は水沢朱音の水着のビニールテープを開けて中身を取り出した。
そして、中身を入れ替えた。
取り出した水着をすぐに先ほどの、待機場所の会議室へと持っていく。
「あれっ、倉橋さん。どうかされましたか？」
その途中、ズノミーの女性社員、佐藤と鉢合わせた。
「ううん。ちょっとトイレに先に行っとうろそう思っ
て」
「そうなんですね」
倉橋恭子はいそいそと、先ほどの会議室に
いって、水着を置いた。
その後、トイレの方へと向かった。
ズノミーの女性社員の佐藤は、トイレに行くの
に、どうして水着を手を持っていたのだろうか
と、疑問に思ったが、倉橋がすぐに去っていっ
たので、詳しく尋ねることはなかった。

「恭子さん、会長いなかったですよ」
女子更衣室で競泳水着に着替えながら、水沢
朱音が倉橋恭子に言う。
「うそー。おかしいなあー」
水沢朱音は何も疑うことなく一度裸になり、競